

「蒙古慣習法の研究」中には掲げられて居る（資料上から言つて既にこの好譯著を有する吾々に裨益する處は多くは無いと言へるのであるが、後半の蒙古諸種族の法律一般に通ずる基礎原理の研究は、「蒙古慣習法の研究」發表後に於ける著者の新成果を示すものであり、斯學に志す者にとつて一讀の價値あるものと認める。又邦譯では心もとなく、露西亞語は讀めないと云ふ讀者にとつては、この著者自身の手になる英文著作の公刊は大いに有益である。

アラン氏「京廷之耶蘇會士」

矢澤利彦

Allan, C. W.; *Jesuits at the Court of Peking*. pp.

300. Shanghai, 1937.

最近十數年間に於ける歐米人の支那キリスト教史に對する研究は極めて著しい現象である。管見の及ぶ範圍だけでもこの間に出版された著作は次の如く多數に上つて居る。

Maaf, O. *Die Wiedereröffnung der Franziskanermission in der Neuzeit*. Münster in Westfalen. 1926.

Biermann, B. M. *Die Anfänge der neueren Dominikanermission in China*. Münster in Westfalen. 1927.

Moran, G. S. *L'épopée des jésuites français en*

China. Paris. 1928.

Latourrette, K. S. A History of Christian Missions in China. New-York. 1929.

Moule, A. C. Christians in China before the year 1550. London. 1930.

Devine, W. The Four Churches of Peking. Tientsin. 1930.

Beckmann, J. Die katholische Missionmethode in China in neuester Zeit(1842-1912). Bethlehenn Immensee. 1931.

Pfister, L. Notices biographiques et bibliographique sur les jésuites de l'ancienne mission de Chine 1552-1773. 2 vols. Chang-Hai. 1932.

Thomas, A. Histoire de la mission de Peking. II Tome. Paris. 1933.

D'Elia, P. M. The Catholic Missions in China. Shanghai. 1934.

これらは總て單行されたものばかりであるが、其他斷片的な論文に至つては枚擧に暇がない。右に掲げた諸著作は皆相當に分り易くは書いてあるが、いづれも綿密に根本資料に基いた研究であつて、各々特色を持つた好著であるが、通俗を主としたものになつた。而してこゝに紹介せんとするアラン氏の「京廷之耶蘇會士」はこれらの諸書と性質を異にし、ぐつとくだけた態度で支那に於ける耶蘇會士の活動を取扱つたもので、氏は序言に於て、

「支那に於ける初期の耶蘇會宣教師の活動は英國の讀者にはよく知られて居ない。本書はその歴史を語るんとする一つの試みである。著者は總て手に入れ難いフランス語・ラテン語・ポルトガル語等の初期の記録に基いて敘述したのであるが、本書は唯興味多き時代を通俗的に述べんと目論んだものであるから、頁下に脚註を付ける類を採らず、主なる參考書の表を最後に掲げて置くに止めた。」

と言つて居るが、これによつて本書編著の目的が那邊にあるかを知り得よう。讀後感を先づ言へば、本書は分り易く、簡略であつてしかも重要な事件に對しては充分な説明を與へてあり、讀者に常に興味を與へると云ふ、一般讀書層に讀ませるための歴史としての充分なる出來榮えを示して居るが、最もうれしいことは面白く書いてあることであり、この點に於いて著者所期の目的は成功したと見るべきである。著者には悪いかもしれないが、種明しをすれば、本書の構成及び内容は殆どかのユックの名著 *History of Christianity in China, Tartary and Thibet* に依據するものであり、これにフィスターの例の *Notices biographiques et bibliographiques sur les Jesuites* を参照したものと一言へる程であるが、著者はこれらによりながらも、ユックの冗長さと生硬さなく、フィスターの多種文獻の引用から來る混沌からは遠く一種渾然として愛すべき好篇を生み出した手際は仲々

アラン氏「京廷之耶穌會士」

鮮かである。本書を讀んで吾々が感ずる面白みは既にユックの中に見出されるものであるが、ユックの古い文章によるよりもアラン氏の新しい筆による方が、より生々とした興味を感ずることは當然である。又ユックの著書が吾々に古く感ぜられ、又讀み難く思はれる第一の原因である、支那の地名・人名・書名・官名等を總て羅馬文字化し、或は歐譯して載せ、漢字名を加へてなかつたことに對して、ローマニゼイション或は英譯名と共にその漢字名をも對照してインデックス中に掲げてあるので、初學者並びに東洋の讀者には頗る便利である。慾を言へば本文中に漢字名を載せて貰ひ度かつたのであるが、それも本書の性質上からはやむを得ず。初學者には Dr. Paul 或は Dr. Leon などと出て來ては（ユックは然り）果してこれを誰に當てよいか見當が付くまい。前者が除光啓であり、後者が李之藻であると檢出し得るとすれば、その便利さは察し得られよう。又本書の索引

には宣教師の漢名をもやはり對照して載せてあるの
で、これも甚だ結構である。これらは勿論フィスター
に據つた處が多いのであらうが、この一冊で大要を
知らうと云ふ人達に對しては親切なやり方であると
言はねばならぬ。

本書編著の目的は前述の如くであるから、著者の
新研究とか、新見解と言つた様な内容的な特徴を期
待する譯にはゆかないが、中で一つ支那高官にして
天主教に歸依した人々、例へば瞿太素・徐光啓・李之
藻等に對して比較的詳細にして正しい記述の行はれ
て居ることは特記すべきであり、此點に關しては他
の同種のものに較べて一段と優つて居る。特に徐光
啓には一章が與へられ、二十數頁に亘つて綿密なる
敘述が行はれて居る。この章など著者が更に研究を
進められれば好個の學術論文となることは疑ひな
く、敢て著者今後の探究に望みを屬する次第である。
リッチ(利瑪竇)が萬曆帝の信任を得て北京滞在を許

可されるに至つた原因は、彼が歐洲より持ち來つた
數々の珍奇、就中自鳴鐘に對する好奇の念に出發す
るものであり、リッチはこの器械を修繕すると言ふ手
段により次第に宮廷に喰ひ入つたこと、支那とカサ
イが同一のものか、或は異なるものかを探險せん
として、一六〇二年アグラを等し、ラホール、カブール、
サマルカンド、ヤルカンド、トルハン、ハミ、居庸關等
を経て、肅州に着き、終に兩者が同一のものであるこ
とを立證した、ベネディクト・ゴエス(鄂本篤)の苦難
に滿ちた旅行と、その劇的な死。開封府に居住せる
猶太人と彼等に對するリッチの研究。アダム・シャ
ール、(湯若望)、フェルビースト(南懷仁)等が宮廷に於
いて高位を占めると共に、支那人及び歐洲人達が内
外から彼等に加へた批難、これに對して耶蘇會士は
如何に戰つたか。支那天主教存亡の危機に於いて北
京に起つた二つの劇的な地震、即ち一は一六六五年
四月十六日シャル以下の宣教師に極刑が定められ

た時、一は一七三〇年九月三十日―十月五日、雍正帝によつて支那天主教會が極度の抑壓下に喘いで居た時に發生したもの、この地震と云ふ天災が天主教の上に及びした影響。康熙朝に於ける皇輿全覽圖の製作。康熙帝の西洋科學に對する研究等、著者の輕快なる筆によつて描出された興味ある事件を一々抜くことは困難である。

最後に本書の内容について二三の愆を言へば、耶蘇會宣教師が宮廷に重用され、布教に従事するを得るに至つた根本的原因、即ち支那人がいかなる立場から彼等の入國を許し、布教を認可したかと云ふ理由。支那人一般は天主教に對していかなる考へを懷いたか。天主教に歸依した支那人はどの様な見解の下に改宗したか。天主教、及びそれに附隨して來傳した西洋の技藝・學術等の支那文化に及びした影響如何。天主教禁抑の諸條件。典禮問題に對する康熙帝の態度。宣教師達の政治的活動（明末諸王擁立

に關係せる活動、露支關係史上に於ける耶蘇會士、雍正朝の謀叛事件に於ける暗躍）。耶蘇會士と他派宣教師群との係争。耶蘇會内部に於ける暗闘。及びこれらが布教の上に與へた反響。耶蘇會士傳教の經濟的根據等に關して尙ほ敘述乃至は説明が不充全であることが上げられるが、頁數等の關係から考へて或は無理な欲求かも知れない。いづれにしても本書は支那に於ける耶蘇會士の活動を要領よくまとめた概説書であると云ふ點では充分に推賞出來るものである。支那天主教史の大體を知らんとする一般讀者には極めて便利な書物であると言へる。